

月刊 中東レポート

クリストファーの 中東歴訪と矛盾の拡大

一九九三年三月一〇日

クリストファーは、初の外國訪問を中東歴訪として行い、その帰路ジユネーブでコズイレフとともに、中東和平会議の四月再開を呼びかけた。そして、三月一〇日、米ロは、二国間交渉の招待状を関係諸国に正式に手渡した。だが、ペレスチナ側は、現状のままでの再開は認めないと、参加拒否を表明、招待状の受け取りを拒否した。

そうした状況を含めて、アラブ側は、統一

した対応を図るために、ラマダン（モスレムの断食月）明けの三月二七一二八日にダマスカスで会議を開くと発表した。この発表は、PLO

のカドウミ政治局長（外務大臣に相当）がダマスカスを訪問し、シャラー外相と討議した結果としてなされた。

シリアは、早期の再開に積極的であり、一見すると、参加を拒否せよというペレスチナ人民の意志との板挟みによる矛盾が、PLO指導部に集中しているように見える。だが、矛盾、ジレンマは交渉に関わっているすべての国、とりわけイスラエル内で生じている。

今号では、クリストファーの歴訪と敵側の矛盾に焦点を当てて、展開したい。

安保理決議七九九に対し、「米＝イスラエル取引」でお茶を濁しただけではなく、一二日には安保理議長声明としてそれを追認させ、中東歴訪へのレールを敷いてはみたものの、おつかなびっくりというのがその実態。「クリント

クリストファーの中東歴訪と矛盾の拡大
料
・ 団結と創造の呼びかけ
・ 被追放者支援の国際会議、決議 (抄)
・ パレスチナ人の再定住化 — レバノン人は反対 (抄)
・ PFLP 第五回大会最終声明 (抄)
・ 特別レポート — ラマダンに入った追放者たち
・ 追放問題 — 何が目新しいことなのか (抄)
・ アラブ系米国人へのスペイ活動 (抄)
・ レバノン・イスラエルとの共同警備案を拒否 (抄)
・ 被占領地の実情 — イスラエルの暴虐
・ 重要日誌 (一九九三年二月一一日～三月一〇日) :
編集後記 : 1716

第88号

発行 ウニタ書舎
東京都千代田区神田神保町1-52
TEL.(03)3291-5533
編集 J.R.A.
郵便振替 東京1-48443
三菱銀行神保町支店 当座9012656
会員制 年会費2400円

ン政権こそ和平を前進させるための誠意を示すべき」（アッサフィール紙）とアラブ側が求めていたにもかかわらず、〈歴訪中に和平の再開で合意しうるかどうか悲観的だが、再開へと結論づけうるよう期待している〉（一五日、ペレスとの会談の後の発言趣旨）などという。

こうしたあり方は、「諸国を交渉の再開のテーブルに着かせることはできると確信している。彼らには別の選択肢はない。和平過程は進むべき唯一の道だ」と歴訪に先だって米当局者が言明したように、湾岸戦争とソ連・東欧の社会主義圏の崩壊後の世界情勢をカサにきて、〈和平的なパートナーシップ〉（ペレスが強調）を前提としたものでしかない。真に推進させようとすれば、他でもなく、一番求められているのが自らであることを承知のうえで、参加国の意向を聞くことと個人的な顔つなぎが中心テーマとぬけぬけと述べ、具体的な解決策もないままに、アラブ側には「米国は和平の全面的なパートナー」などと言つて回つたのであった。

そうした米国の方にもかかわらず、概してアラブ諸国の反応がいいことで調子に乗つたクリストファーは、イスラエル滞在中に、ガリリーとゴランを訪問した。これはイスラエル側が主張する「イスラエルにとっての安全保障」、言い換えれば、イスラエルの領土拡張を承認し、シリヤやレバノンに対しても、安保理決議二四

大騒ぎになつた。国務省が慌てて、「多分、彼の個人的な見解からであろう。だが、彼は指示に基づいて話したのではないことを強調する」と発表したが、これは逆に米国内でも、一〇〇億ドルの信用保証をも含めた、イスラエル支援のあり方に関する論議を招くことになった。

他方、一月のCIA前での乱射事件でも、二月の世界貿易センター爆弾でも、原理主義者の仕業と喧伝し、イスラエル内でのアラブ系米国人の「ハマス活動家」逮捕とあいまつて、反原理由主義キヤンペーンを展開している。だが、そうちした動きはユダヤ系の報道機関の情報操作もあって、アラブ、モスレムへの人種差別傾向を醸成することになつていている。第二次大戦時の日系差別、湾岸戦争時のアラブ系差別、あるいは連綿と続き、ロスアンジェルスの暴動へともつながつた黒人差別と同様のものが、アラブ人を狙つて反名譽棄損同盟（ADL）などのユダヤ組織によつて意識的に作られている（資料参考照）。

これはアラブ系米国人の間に恐怖を招くとともに、シオニストの陰謀への怒りを拡大することになり、広範な米市民の間にもシオニストの策動への疑問を大きくさせている。なにしろ、貿易センター爆弾の予告電話はクロアチア云々だつたし、「犯人の一人」として捕まつたM・サラーム氏が連絡先として残した電話番号はユダヤ人女性（モサドだとも言われている）であつたにもかかわらず、原理主義のことだけがまことしやかに喧伝されるあり方は、逆に疑問

べき」（アッサフィール紙）とアラブ側が求めているにもかかわらず、〈歴訪中に和平の再開で合意しうるかどうか悲観的だが、再開へと結論づけうるよう期待している〉（一五日、ペレスとの会談の後の発言趣旨）などという。

こうしたあり方は、「諸国を交渉の再開のテーブルに着かせることはできると確信している。彼らには別の選択肢はない。和平過程は進むべき唯一の道だ」と歴訪に先だって米当局者が言明したように、湾岸戦争とソ連・東欧の社会主義圏の崩壊後の世界情勢をカサにきて、〈和平的なパートナーシップ〉（ペレスが強調）を前提としたものでしかない。真に推進させようとすれば、他でもなく、一番求められているのが自らであることを承知のうえで、参加国の意向を聞くことと個人的な顔つなぎが中心テーマとぬけぬけと述べ、具体的な解決策もないままに、アラブ側には「米国は和平の全面的なパートナー」などと言つて回つたのであった。

そうした米国の方にもかかわらず、概してアラブ諸国の反応がいいことで調子に乗つたクリストファーは、イスラエル滞在中に、ガリリーとゴランを訪問した。これはイスラエル側が主張する「イスラエルにとっての安全保障」、言い換えれば、イスラエルの領土拡張を承認し、シリヤやレバノンに対しても、安保理決議二四

二や四二五の尊重ではなく、イスラエルの安全のための新たな国境線を強要するという意味になる。

他方、最大の難関と言われたパレスチナ側に對しても、六点の調停案を提示して、和平の早期再開へと同意を取り付けようとした。六点とは、①米が、追放は違法と声明し、イスラエルに七九九の遵守を呼びかける、②次回の交渉で二四二、三三八ならびにエルサレムのステータスについて米は、明確に関与する、③将来追放はしないとイスラエルが約束する、④七九九に沿った帰還の促進、⑤六七年以降の追放者の一定の帰還、⑥被占領地での人権侵害の停止、といわれるが、イスラエル側が、そのうちの二点（②、③）を拒否（二七日、PLO筋発表）。結果全局全体をうやむやにしたまま、パレスチナの交渉への参加問題はその説得の責任をアラブ側に預けてしまった。

これが「全面的なパートナー」とか、「積極的に推進する」と自称する者の実態であり、それが、いかに加減なかで、ジユネーブでコズィーレフをも抱き込んで、和平の四月再開を打ち上げたのである。

クリントン政権は、サウジに対してもボスニアへのラシッド・ホテル爆撃でも、さらには、ボスニアへのパラシュー投下の第一日目に、「目標の六〇メートル以内に落とした。大成功」という嘘でもそだつたように、人々は「大本営発表」を信用しない。中東和平に関する「シオニストの陰謀」、人権を掲げるADLがFBIとともに人種差別行為を率先、という現実を見ようともしないで、発表を鵜呑みにして〈たつた四〇〇ドルのために……ばかなテロリスト〉などと得々と語る方がどうかしているというものであろう。

イスラエルは対PLO法の改正を行つたが、ラビン政権には、前号でも触れたように、PLOと接触する意志はない。同様に、クリントン政権にもそだする意志はない。そうしたなかで、英は、PLOとの対話を再開した。また、イスラエルも米国も、対PLOといふことでは、これまでハマスと積極的に関係をもつてきた。この間の反原理主義の流れを作り出すためにも、国務省は三月一日、ハマスとの接觸を停止するよう在外公館に通告を発したが、それは逆に、米大使館が、ハマスとの接觸してきたことを認めることになった。ハマスとの接觸ということでは、英、イタリー、独などは大使が接觸していたし、英は「広範なパレスチナとの接觸を保つ」としている。米・イスラエルの意向が決して眞の中東和平を創り出すものではないこと、反原理主義云々の喧伝のあまりのおそまつさを歐州諸

を大きくさせている。

湾岸戦争時のことでも、一月の（バグダッドの）ラシッド・ホテル爆撃でも、さらには、ボスニアへのパラシュー投下の第一日目に、「目標の六〇メートル以内に落とした。大成功」という嘘でもそだつたように、人々は「大本営発表」を信用しない。中東和平に関する「シオニストの陰謀」、人権を掲げるADLがFBIとともに人種差別行為を率先、という現実を見ようともしないで、発表を鵜呑みにして〈たつた四〇〇ドルのために……ばかなテロリスト〉などと得々と語る方がどうかしているというものであろう。

クリントン政権は、サウジに対してもボスニアへのラシッド・ホテル爆撃でも、さらには、ボスニアへのパラシュー投下の第一日目に、「目標の六〇メートル以内に落とした。大成功」という嘘でもそだつたように、人々は「大本営発表」を信用しない。中東和平に関する「シオニストの陰謀」、人権を掲げるADLがFBIとともに人種差別行為を率先、という現実を見ようともしないで、発表を鵜呑みにして〈たつた四〇〇ドルのために……ばかなテロリスト〉などと得々と語る方がどうかしているというものであろう。

クリントン政権は、サウジに対してもボスニアへのラシッド・ホテル爆撃でも、さらには、ボスニアへのパラシュー投下の第一日目に、「目標の六〇メートル以内に落とした。大成功」という嘘でもそだつたように、人々は「大本営発表」を信用しない。中東和平に関する「シオニストの陰謀」、人権を掲げるADLがFBIとともに人種差別行為を率先、という現実を見ようともしないで、発表を鵜呑みにして〈たつた四〇〇ドルのために……ばかなテロリスト〉などと得々と語る方がどうかしているというものであろう。

クリントン政権には、前号でも触れたように、PLOと接觸する意志はない。同様に、クリントン政権にもそだする意志はない。そうしたなかで、英は、PLOとの対話を再開した。また、イスラエルも米国も、対PLOといふことでは、これまでハマスと積極的に関係をもつてきた。この間の反原理主義の流れを作り出すためにも、国務省は三月一日、ハマスとの接觸を停止するよう在外公館に通告を発したが、それは逆に、米大使館が、ハマスとの接觸してきたことを認めることになった。ハマスとの接觸ということでは、英、イタリー、独などは大使が接觸していたし、英は「広範なパレスチナとの接觸を保つ」としている。米・イスラエルの意向が決して眞の中東和平を創り出すものではないこと、反原理主義云々の喧伝のあまりのおそまつさを歐州諸

軍による発砲に関する発表でもこうした嘘が不斷になされているし、なによりも「追放によつて治安は回復した」と語つたラビンの嘘が、無差別的な家屋破壊、大量逮捕、封鎖、外出禁止令などなどの連発で証明されている。そうして嘘をもつての占領の継続というあたり方が人民の怒りを拡大し、闘いを拡大していくことになっている。マドリッドでの中東和平の開催に際して、オリーブの小枝を兵士に手渡した同じ少年たちがイスラエル軍に投石を展開しているのも、敵の嘘、ニセの発表、暴虐などの結果である。そしてまた、そうした嘘を日常的に目あたりにしているからこそ、人民は、米国をも含めた二七発表（＝大本営発表）に簡単に騙されないのである。

四 問われるアラブ側の統一と人民の力

三月六日、PLO執行委員会は、「現状のまでは和平過程の再開に応じえないこと」、したがつて障害の除去を希望する」という声明を発表した。代表団側が、「再開には応じられない」と言明しているのに比較して、より柔軟な姿勢をとつた。

二月中旬にエルサレムの報道界が行つた世論調査では、被占領下の人民の五人に四人は（追

四 問われるアラブ側の統一と人民の力

る。そしてまた、そよした嘘を日常的に目のあたりにしているからこそ、人民は、米国をも含めた二七発表（＝大本営発表）に簡単には騙されないのである。

軍による砲撃に関する発表でもこうした嘘が不斷になされているし、なによりも「追放によつて治安は回復した」と語つたラビンの嘘が、無差別的な家屋破壊、大量逮捕、封鎖、外出禁止令などなどの連發で証明されている。そうして嘘をもつての占領の継続というあり方が人民の怒りを拡大し、闘いを拡大していくことになっている。マドリッドでの中東和平の開催に際して、オリーブの小枝を兵士に手渡した同じ少年たちがイスラエル軍に投石を展開しているのも、敵の嘘、ニセの発表、暴虐などの結果である。そしてまた、こうした嘘を日常的に目あたりにしているからこそ、人民は、米国をも含めた二セ発表（＝大本営発表）に簡単に騙されないのである。



三

米＝イスラエルは、原理主義、テロに狙いを定めて、さまざまな攻勢をかけている。ハマス・ネットワーク、原理主義者による爆弾など、中東に焦点をあてたキヤンペーンは、イスラエルによる追放問題をかき消し、アラブ側に妥協を迫るためである。他方、（イスラエルの核はまったく不間にしておきながらの）北朝鮮の核問題も、スラビア叩きもイスラエルの不法性を隠す小道具を使われている。

た。「もし、アラファートが迫放問題を脇に置くなら、彼はパレスチナ人民の意志を脇に置くことになる」という警告を被迫放者たちが発しているのもそうした実情を背景にしている。

他方、ヨルダンのフセイン王は、「パレスチナ人が不在のなかでパレスチナ問題を解決できるとは考えない。われわれは代表団の半分で参加することはできない」、「パレスチナ人に（彼らの目標）達成の希望を抱かせてナッシュしてきた他の者が、彼らを引き下ろすようなことは、道義上考えたくない」と発言した。

こうした動きに危機感を持つがゆえに、一方で、ゴランの返還という甘言を云々し、他方では、すべての参加者が早期の再開を希望しており、米国は積極的な役割を果たす。仮に、ペレスチナとヨルダンが欠席しても再開する（三月九日、クリントン）の脅迫発言を行つて

た。「もし、アラファートが追放問題を脇に置くなら、彼はパレスチナ人民の意志を脇に置くことになる」という警告を被迫放者たちが発しているのも、そうした実情を背景にしている。

他方、ヨルダンのフセイン王は、「パレスチナ人が不在のなかでパレスチナ問題を解決できることは考えない。われわれは代表団の半分で参加することはできない」、「パレスチナ人に（彼らの目標）達成の希望を抱かせてナッシュして、きた他の者が、彼らを引き下ろすようなことは、道義上考えたくない」と発言した。

「イスラエルの不当性」二股政策がいつそう明確になる。そして、人民の鬨いは、ラビン自身がジレンマに陥っていると認めるように、敵の化けの皮をはがし、着実に敵を窮地に追い込んでいる。

敵の攻撃は、中東というレベルに留まつてはいない。人民の側も至るところで、敵の嘘を暴き、敵に国際的な正当性を認めさせ、遵守させようの闘いを展開すること、より幅広く力を合わせていくことが問われている。

「イスラエルの不當性」二股政策がいつそう明確になる。そして、人民の鬨いは、ラビン自身がジレンマに陥っていると認めるよう、敵の化けの皮をはがし、着実に敵を窮地に追い込んでいる。

一方的撤退を主張する側は、撤退によつてペレスチナを封じ込め、かつペレスチナ内部に矛盾、対立を起こさせることを狙つてゐるのだが、逆に極右植者などの反発と暴走を呼び、混乱を拡大させることになつてゐる。

上述した米の援助問題に加えて、チーフ・ラビの選出をめぐる腐敗の表面化。政界内のさまざまな腐敗、汚職、閣内からのガザ撤退論ともあいまつて、ユダヤ人内部にさえも、政府や宗教界、財界への不信が高まつてゐる。またラビンのあり方は、ラビンの選挙公約に期待をかけたペレスチナ側の代表団（ラビンが唯一交渉の対象者としているペレスチナ人）をかなたへと追いやることになつてゐるのである。

三 人民の鬨い

インティファーダの鎮圧を目的としたラビン政権による追放は、逆に人民の鬨いの火に油を注ぐ形になつたことは、これまでの号でも述べてきた。

安保理決議七九九をうやむやにせんとする「米＝イスラエル取引」、すなわち「シオニストの陰謀」は、「ハマス・ネットワーク」を喧伝

三
人民の聞い

一方的撤退を主張する側は、撤退によつてペレスチナを封じ込め、かつペレスチナ内部に矛盾、対立を起こさせることを狙つてゐるのだが、逆に極右植者などの反発と暴走を呼び、混乱を拡大させることになつてゐる。

上述した米の援助問題に加えて、チーフ・ラビの選出をめぐる腐敗の表面化。政界内のさまざまな腐敗、汚職、閣内からのガザ撤退論ともあいまつて、ユダヤ人内部にさえも、政府や宗教界、財界への不信が高まつてゐる。またラビンのあり方は、ラビンの選挙公約に期待をかけたパレスチナ側の代表団（ラビンが唯一交渉の対象者としているパレスチナ人）をかなたへと追いやることになつてゐるのである。

二月一七日、被追放者たちは、追放三カ月目に際して、ズムラヤ検問への「帰還のデモ」を展開した。追放そのものの不法性を非難し、即刻の全員の帰還、すなわち安保理決議七九九の遵守を要求するとともに、被占領地内におけるイスラエル軍の暴虐行為の拡大を非難し、ジュネーブ条約の遵守を要求、クリストファーの歴訪に對してパレスチナ代表団ならびにアラブ諸国が決議七九九をうやむやにしたままで和平の再開に応じることの危険性などを掲げてデモをし、帰還の想いをこめて、風船を飛ばした。

ペイントで開かれていた追放者支援の国際会議は、追放に代表される「米シオニストによるパレスチナの大義を抹消しよう」という策謀との対決、被追放者の鬪い、被占領地内の人民の鬪いとの呼応、などを採択した（資料参照）。会議では、米イスラエル取引とクリストファーの歴訪への非難が相次いだ。

南部のレジスタンスは、ムサウイ師虐殺一周忌ともあいまって、果敢な鬭いを展開した。とりわけ、二月一七日には、SLAの前線基地への大規模な攻撃をかけ、四つの基地を完全に破

被占領地内の鬭いは、いつそうの激しさをもつて、拡大している。軍に対する発砲事件は拡大し、ナイフを用いた攻撃も拡大の一途をたどっている。三月一日、テルアビブでのガザ出身の青年による攻撃は、ユダヤ人に二人の死者、九人の負傷者を出した。イスラミック・ジハードが責任声明で、「シオニストの暴虐と傲慢さに対するものであり、われらが人民の権利に対する国際的な軽視に対するもの」であり、「この行動はパレスチナ人の追放や家屋の破壊についてはイスラエルが望むような安全を保障しないことを証明した」と発表した。が、イスラエル当局は、「仕事が見つからないことからの個人的な不満による行動」として処理せんとした（この後、ガザの封鎖を行い、それが契機となつて、ガザからの撤退論議に火がついた）。

三日にエルサレムで起きたパレスチナ女性によるナイフ攻撃（イスラエルの警備員が負傷）でも、軍は、（彼女は頭痛で苦しんでいた）つまり、政治的な行動ではないなどと嘘の発表をした。だが、九日、イスラエルの高裁は、別の件で捕まつた一四歳のパレスチナ少女に対して軍が、取調べ待機を口実に五時間以上も

れ、少なくとも六人の閣僚がガザ撤退論を支持している。八六号資料でも記したように、ガザの兵たちのなかからも「レバノン化の進行」（八二年の侵略の後のレバノンのように、占領の継続が不可能な状況の進行）への警告が出され、兵たちがパニック状況に陥っているのが実状である。

するために、アラブ系米人の逮捕、さらには、貿易センター爆弾での原理主義非難となって現れている。だが、厳寒のテント村での生活を闘いとした被追放者たちの創意に満ちた闘い、被占領地内の人民の闘い、レバノン南部のレジスタンスの呼応は敵を追いつめ、自己矛盾へと追込み、それが人民の闘いをいつそう強力にさ

壊し、数名を捕虜にした。イスラエル側は、警戒体制を敷いていたが、こうした攻撃を防ぎきなかつた。軍当局は、「攻撃があつたがそれを追い返した」と発表して、事態の深刻さをごまかそうとしたが、周辺三〇町村への激しい砲撃（市民五人死亡、四〇人近くの負傷）は攻撃と自らの動搖の大きさを逆に証明した。

下におかれている。敵シオニズムのかかる犯罪の別の誘因は、アラブ諸政権の屈服寸前の動搖状況である。それはパレスチナの大義を清算し、「平和解決」という米国主導の交渉への参加に端的に示されている。

会議は、今回の犯罪行為のはらむ危険性、われらが未来とパレスチナの大義への重大な挑戦を認識しつつ、以下宣言した。

1、今回の追放決定は、米国の支持の下、シオニズム占領統治体による一連のパレスチナの大義抹消策動の一環であり、危険極まりないものである。

2、安保理決議のごまかしを拒否し、その即時全面実施と四七年以來の被追放者の帰還を強く訴え、国連と安保理を米国のコントロール下から解き放つことを呼びかける。その最初の証しは、シオニズム擬制国家に対する同決議の強制であり、パレスチナ人民に対する一連の犯罪行為に対する制裁である。

3、一方での、シオニズム擬制国家への対応、他方での、イラク、リビア、ソマリア、ボスニアなどへのあり方に示される国連の偏向政策は、国連に対する米国支配の明証である。

4、パレスチナ代表団ならびにアラブ側代表団に、二国間・多国間交渉からの撤退を呼びかける。交渉は、パレスチナの大義と占領統治体と闘っている人民に対する陰謀を加速させる以外のなものでもない。

5、「新世界秩序」の下での危険は、米＝イス

く働いていることを示している。たとえば、モスレムのスンニ派はパレスチナ人との強力つながりが示され、キリスト教のマロン派はそれが最も弱かつた。ドルーズやローマ正教は、他に比べて、政治的な関係性を示し、驚くことはないが、マロン派はパレスチナ人の地位向上に一番強く反対を示した。

過去には、パレスチナの武装存在がレバノンの内戦にも大きな関わりを持っていた。2、一部から、約四〇万のパレスチナ難民がこの国に定住することになるのではという危惧の声が出ている。3、とりわけ、現在の中東和平交渉が、アラブ＝イスラエル対立の解決の一部として、レバノンに在住するパレスチナ人の定住が図られるという見方が大きい。4、最近の追放問題から、イスラエルが将来さらに多くのパレスチナ人をレバノンに追放し、彼らの定住を強要していく可能性が大きい。こうしたことなどから関心＝懸念が高まっている。

地域別では、パレスチナ人の定住化に最も反対を示しているのは、マウンテン・レバノンとベイールート地区で、それに北部が続いている。反対が最も少ないのが、ベイールート地区と南部である。これは、ベイールート地区と南部では、パレスチナとの接触が日常的で、緊密な関係を有しているレバノン人が多いせいであろう。

調査した二五%の人々が、なんらかの形でパ

PFLP 第五回大会最終声明（抄）
アル・ハダフ誌、第一一三七号

〔第五回大会は、刷新＝再生、党の大衆性強化、パレスチナ国民憲章達成途上にあるインティファーダの防衛・発展、清算・投降路線との対決の出発点である」とのスローガンの下、開催された。〕

真剣かつ客観的批判的な精神と高い民族意識

をもって、大会代議員は、党活動のさまざま

な開拓活動を行った。

大会は、八一年五月の第四回大会以来、わが

組織が果たしてきた役割を高く評価し、この期

間にパレスチナ民族運動が直面してきたいくつ

もの里程標をふり返ってみた。八二年のシオニ

ストの侵攻との闘いとベイールートでの対峙、敵

をレバノン領のほとんどから駆逐したレバノン

の民族的イスラム的抵抗運動の創設と発展、八

月刊 中東レポート

14、あらゆる人種差別・抑圧・貧困と闘つてい

る世界の解放運動、とりわけマドリッド＝ワシ

ントン交渉に反対している人々にあいさつを送

る。同時に、列強とその手先がもたらす危険と

と協力を呼びかける。

6、アラブ・イスラム民族と超大国・擬制国家

との対立の核心であるパレスチナの大義における、iran・シリアの同盟関係の重要性を高く評価する。

7、追放問題に対するレバノンの立場の重要性。この立場の堅持を訴える。

8、レバノンのレジスタンスは、聖なる権利であり、これへの支援を呼びかける。

9、南部のレジスタンスの英雄たちにあいさつを送る。

10、インティファーダの英雄たちにあいさつを送る。数多くの殉教のなかで、抵抗とインティファーダのみが、被占領アラブ領解放の道であることを示している。交渉はさらなる隸属化への道である。

11、パレスチナ、ゴラン、南部レバノンにおける人民の反占領のレジスタンスを称える。

12、マルジ・アッズホールで闘つている被占放の兄弟たちに、あいさつを送る。彼らは、その立場によってインティファーダの、人民の本当の力を示し、その人民を代表し、権利を守るかのように詐称した者たちの虚偽を暴いた。

13、今会議開催中に一周忌を迎えたムサウイ師とその妻子の殉教をはじめ、すべての殉教者、負傷者、獄中者にあいさつを送る。

パレスチナ人の再定住化——レバノン人は反対（抄）

アツサフィール紙、二月一九日と二〇日

人民に眞の平和を！そして、神の御慈悲と祝福を！

レバノンのいろいろな宗派、地域、社会的な地位などから抽出された、約一〇〇〇人の男女に対する調査の結果、多くのレバノン人は、パレスチナ人の再定住化に反対であることが、示された。だが、同時に、二五%はパレスチナ人の社会的な地位の向上に賛成し、八%は「パレスチナ人に彼らの郷土を忘れないような措置をとること」を主張した。

本社が行つた調査では、宗教的な影響が大き

る世界の解放運動、とりわけマドリッド＝ワシ

ントン交渉に反対している人々にあいさつを送

る。同時に、列強とその手先がもたらす危険と

と協力を呼びかける。

6、アラブ・イスラム民族と超大国・擬制国家

との対立の核心であるパレスチナの大義における、iran・シリアの同盟関係の重要性を高く評価する。

7、追放問題に対するレバノンの立場の重要性。この立場の堅持を訴える。

8、レバノンのレジスタンスは、聖なる権利であり、これへの支援を呼びかける。

9、南部のレジスタンスの英雄たちにあいさつを送る。

10、インティファーダの英雄たちにあいさつを送る。数多くの殉教のなかで、抵抗とインティファーダのみが、被占領アラブ領解放の道であることを示している。交渉はさらなる隸属化への道である。

11、パレスチナ、ゴラン、南部レバノンにおける人民の反占領のレジスタンスを称える。

12、マルジ・アッズホールで闘つている被占放の兄弟たちに、あいさつを送る。彼らは、その立場によってインティファーダの、人民の本当の力を示し、その人民を代表し、権利を守るかのように詐称した者たちの虚偽を暴いた。

13、今会議開催中に一周忌を迎えたムサウイ師とその妻子の殉教をはじめ、すべての殉教者、負傷者、獄中者にあいさつを送る。



ラエル＝西側枢軸に対し、政治的、社会的、経済的、その他あらゆる面でのわれわれの高度の協力を求めている。すべての党派、勢力に、力を統一し、超大国と擬制国家に対する抵抗路線と協力を呼びかける。

14、あらゆる人種差別・抑圧・貧困と闘つてい

る世界の解放運動、とりわけマドリッド＝ワシ

ントン交渉に反対している人々にあいさつを送

る。同時に、列強とその手先がもたらす危険と

と協力を呼びかける。

6、アラブ・イスラム民族と超大国・擬制国家

との対立の核心であるパレスチナの大義における、iran・シリアの同盟関係の重要性を高く評価する。

7、追放問題に対するレバノンの立場の重要性。この立場の堅持を訴える。

8、レバノンのレジスタンスは、聖なる権利であり、これへの支援を呼びかける。

9、南部のレジスタンスの英雄たちにあいさつを送る。

10、インティファーダの英雄たちにあいさつを送る。数多くの殉教のなかで、抵抗とインティファーダのみが、被占領アラブ領解放の道であることを示している。交渉はさらなる隸属化への道である。

11、パレスチナ、ゴラン、南部レバノンにおける人民の反占領のレジスタンスを称える。

12、マルジ・アッズホールで闘つている被占放の兄弟たちに、あいさつを送る。彼らは、その立場によってインティファーダの、人民の本当の力を示し、その人民を代表し、権利を守るかのように詐称した者たちの虚偽を暴いた。

13、今会議開催中に一周忌を迎えたムサウイ師とその妻子の殉教をはじめ、すべての殉教者、負傷者、獄中者にあいさつを送る。

14、あらゆる人種差別・抑圧・貧困と闘つてい

る世界の解放運動、とりわけマドリッド＝ワシ

ントン交渉に反対している人々にあいさつを送

る。同時に、列強とその手先がもたらす危険と

と協力を呼びかける。

6、アラブ・イスラム民族と超大国・擬制国家

との対立の核心であるパレスチナの大義における、iran・シリアの同盟関係の重要性を高く評価する。

7、追放問題に対するレバノンの立場の重要性。この立場の堅持を訴える。

8、レバノンのレジスタンスは、聖なる権利であり、これへの支援を呼びかける。

9、南部のレジスタンスの英雄たちにあいさつを送る。

10、インティファーダの英雄たちにあいさつを送る。数多くの殉教のなかで、抵抗とインティファーダのみが、被占領アラブ領解放の道であることを示している。交渉はさらなる隸属化への道である。

11、パレスチナ、ゴラン、南部レバノンにおける人民の反占領のレジスタンスを称える。

12、マルジ・アッズホールで闘つている被占放の兄弟たちに、あいさつを送る。彼らは、その立場によってインティファーダの、人民の本当の力を示し、その人民を代表し、権利を守るかのように詐称した者たちの虚偽を暴いた。

13、今会議開催中に一周忌を迎えたムサウイ師とその妻子の殉教をはじめ、すべての殉教者、負傷者、獄中者にあいさつを送る。

14、あらゆる人種差別・抑圧・貧困と闘つてい

る世界の解放運動、とりわけマドリッド＝ワシ

ントン交渉に反対している人々にあいさつを送

る。同時に、列強とその手先がもたらす危険と

と協力を呼びかける。

6、アラブ・イスラム民族と超大国・擬制国家

との対立の核心であるパレスチナの大義における、iran・シリアの同盟関係の重要性を高く評価する。

7、追放問題に対するレバノンの立場の重要性。この立場の堅持を訴える。

8、レバノンのレジスタンスは、聖なる権利であり、これへの支援を呼びかける。

9、南部のレジスタンスの英雄たちにあいさつを送る。

10、インティファーダの英雄たちにあいさつを送る。数多くの殉教のなかで、抵抗とインティファーダのみが、被占領アラブ領解放の道であることを示している。交渉はさらなる隸属化への道である。

11、パレスチナ、ゴラン、南部レバノンにおける人民の反占領のレジスタンスを称える。

12、マルジ・アッズホールで闘つている被占放の兄弟たちに、あいさつを送る。彼らは、その立場によってインティファーダの、人民の本当の力を示し、その人民を代表し、権利を守るかのように詐称した者たちの虚偽を暴いた。

13、今会議開催中に一周忌を迎えたムサウイ師とその妻子の殉教をはじめ、すべての殉教者、負傷者、獄中者にあいさつを送る。

14、あらゆる人種差別・抑圧・貧困と闘つてい

る世界の解放運動、とりわけマドリッド＝ワシ

ントン交渉に反対している人々にあいさつを送

る。同時に、列強とその手先がもたらす危険と

と協力を呼びかける。

6、アラブ・イスラム民族と超大国・擬制国家

との対立の核心であるパレスチナの大義における、iran・シリアの同盟関係の重要性を高く評価する。

7、追放問題に対するレバノンの立場の重要性。この立場の堅持を訴える。

8、レバノンのレジスタンスは、聖なる権利であり、これへの支援を呼びかける。

9、南部のレジスタンスの英雄たちにあいさつを送る。

10、インティファーダの英雄たちにあいさつを送る。数多くの殉教のなかで、抵抗とインティファーダのみが、被占領アラブ領解放の道であることを示している。交渉はさらなる隸属化への道である。

11、パレスチナ、ゴラン、南部レバノンにおける人民の反占領のレジスタンスを称える。

12、マルジ・アッズホールで闘つている被占放の兄弟たちに、あいさつを送る。彼らは、その立場によってインティファーダの、人民の本当の力を示し、その人民を代表し、権利を守るかのように詐称した者たちの虚偽を暴いた。

13、今会議開催中に一周忌を迎えたムサウイ師とその妻子の殉教をはじめ、すべての殉教者、負傷者、獄中者にあいさつを送る。

14、あらゆる人種差別・抑圧・貧困と闘つてい

る世界の解放運動、とりわけマドリッド＝ワシ

ントン交渉に反対している人々にあいさつを送

る。同時に、列強とその手先がもたらす危険と

と協力を呼びかける。

6、アラブ・イスラム民族と超大国・擬制国家

との対立の核心であるパレスチナの大義における、iran・シリアの同盟関係の重要性を高く評価する。

7、追放問題に対するレバノンの立場の重要性。この立場の堅持を訴える。

8、レバノンのレジスタンスは、聖なる権利であり、これへの支援を呼びかける。

9、南部のレジスタンスの英雄たちにあいさつを送る。

10、インティファーダの英雄たちにあいさつを送る。数多くの殉教のなかで、抵抗とインティファーダのみが、被占領アラブ領解放の道であることを示している。交渉はさらなる隸属化への道である。

11、パレスチナ、ゴラン、南部レバノンにおける人民の反占領のレジスタンスを称える。

12、マルジ・アッズホールで闘つている被占放の兄弟たちに、あいさつを送る。彼らは、その立場によってインティファーダの、人民の本当の力を示し、その人民を代表し、権利を守るかのように詐称した者たちの虚偽を暴いた。

13、今会議開催中に一周忌を迎えたムサウイ師とその妻子の殉教をはじめ、すべての殉教者、負傷者、獄中者にあいさつを送る。

14、あらゆる人種差別・抑圧・貧困と闘つてい

る世界の解放運動、とりわけマドリッド＝ワシ

ントン交渉に反対している人々にあいさつを送

る。同時に、列強とその手先がもたらす危険と

と協力を呼びかける。

6、アラブ・イスラム民族と超大国・擬制国家

との対立の核心であるパレスチナの大義における、iran・シリアの同盟関係の重要性を高く評価する。

7、追放問題に対するレバノンの立場の重要性。この立場の堅持を訴える。

8、レバノンのレジスタンスは、聖なる権利であり、これへの支援を呼びかける。

9、南部のレジスタンスの英雄たちにあいさつを送る。

10、インティファーダの英雄たちにあいさつを送る。数多くの殉教のなかで、抵抗とインティファーダのみが、被占領アラブ領解放の道であることを示している。交渉はさらなる隸属化への道である。

11、パレスチナ、ゴラン、南部レバノンにおける人民の反占領のレジスタンスを称える。

12、マルジ・アッズホールで闘つている被占放の兄弟たちに、あいさつを送る。彼らは、その立場によってインティファーダの、人民の本当の力を示し、その人民を代表し、権利を守るかのように詐称した者たちの虚偽を暴いた。

13、今会議開催中に一周忌を迎えたムサウイ師とその妻子の殉教をはじめ、すべての殉教者、負傷者、獄中者にあいさつを送る。

14、あらゆる人種差別・抑圧・貧困と闘つてい

る世界の解放運動、とりわけマドリ

余儀なくさせるには、大衆の革命的暴力と武装闘争に依らねばならないこと、軍事行動を拡大し、さまざまな武装放棄の試みを失敗させ、対敵闘争を継続することなどの諸決定を採択した。采えあるインティファーダは、パレスチナ全組織の軍事行動の重要性を明確にしている。インティファーダは、大衆的、政治的、経済的、思想的なあらゆる闘争手段を拡大し、豊富化することだけではなく、拡張主義的、人種主義的、ファシシヨ的な敵・擬制国家の面前で、あるいは本来の住民の消滅を策す占領に対し、武装対決を拡大することの必要性をも要求している。

大会は、わが民族的、パン＝アラブ的闘争の総括として、重要な点を確認し、自由と独立・帰還・自決・パレスチナの地における建国とい

- 1、同戦線を一躍国際的に有名にさせたハイジ・ヤックなどの海外作戦に責任を負っていたワディア・ハツダードの活動の再考||復権である。ハバシュ自身のアレンジの下、七六年にワディアとそのグループは分離された(ワディア自身は、七八年にベルリンの病院で死亡)が、復権というわけである。
- 2、そのこととも関連するが、「敵の裏側のどこででも」というスローガン。明確にはされていないが、かつてハバシュ本人によつて停止が指示された海外作戦の復権の可能性がある。
- 3、被占領地にとつてのヨルダンの位置の強調。これが、ヨルダンに武装拠点を設置することなのか、ヨルダン川越えの作戦を活性化するといふことなのかは判らない(が、こうした活動は

特別レポート——ラマダンに入つた 追放者たち

トしている。
された若い世代は彼の支持者である、とコメ

関連して、大会ではハバシュと副書記長のアリ・ムスタファとの間で、ヨルダンでの戦線の活動について激烈な論争が展開された。ヨルダンの兄弟党を通してではなく、ヨルダン在住のパレスチナ人によって組織されること主張したハバシュに軍配が上がった。が、大会は一時気まずい雰囲気に包まれた、という。大会は、ハバシュが呼びかけた「再生」「刷新」というスローガンのもとに開催され、人事も大幅に刷新された。

パレスチナ筋は、第五回大会の結果を、ハバシュは、その健康状態にもかかわらず、彼こそ同哉泉の指導者であることを示す所で選

ワディアの復権（抄）
P.F.L.P. 第五回大会——ハバシュの指導権と
アル・ハヤト紙、二月二一日

ワディアの復権 (抄)
レ・ハマー紙、二月二日

族的表現者として、わが戦線を發展させる地平を切り拓いた。
大会スローガンは、われわれを導く羅針盤となる。
（捕捉に代えて）

レンドルダ、車を田レンドルダ、当院との問題へ直面する

卷之三

の重要性を与え、それらが民族的統一、英雄的
・ンティファーダで果たす役割を活性化させる

拡大といつた、公然たる武装抵抗の拡大とともに現れている、いくつかの否定的現象を指摘し、検討を加えることを決定した。また、党の大衆的性格の強化のため、民主的大衆組織や組合

大会は、主要任務の一つが、人民内の全階層に於て、支部を持ち、人民とともに生き、民族的、倫理的価値を堅持していく大衆政黨の建設にあることを決議した。大会は、官僚主義、党専徳の

の女性の増加 旧指導者の多くの同志が外出途退の範を示し、若手にその席を譲つたことを称賛する。これは大会の民主性を証明し、戦線内の再生の能力と戦線内の健全な関係、進歩を示してゐる。

（党内生活について）
大会は民主主義を明らかにした。
新中央委における新人の高い比率と、指導部

アラブの現実を考慮しつつ、マルクス主義のラブ化を図り沈滯を克服していくことを決定した。アラブ主義構想の揺らぎにもかかわらず、経験は正しさを証明してきた。

主義、宗教的諸潮流を込んだ幅広いアラブ戦線の構築が求められている。

のはさほど多くはないと考えたのだ。内政上の基本的な配慮は三つあった。一つは、厳しい決定を下すことで政府の決意と強さを示し、甘い、怠慢だ、といった大衆感情の増大、右派からの攻撃をかわすことである。ラビンはイスラエル内での威信の回復と右派封じこめを求めた。さらには、劇的な措置を講ずることで大衆をなだめることも欲した。

第二は、ラビン自身のタカ派としての証明であり、連立政権の基盤を固めることである。ツオメットや宗教政党各党を含めた連立の可能性を探る。第三は、被占領地内での交渉反対派に対する痛烈な一撃。被占領地内反対派の弱体化を計ったのだ。イスラエルの支配層が「肯定的雰囲気」とよぶ、被占領地での交渉支持の気運を確保するためには、なじみにくい、好ましからざる手段も用いられるというパレスチナ人へのメッセージだった。

今後のためにも、言及すべき基本点。

1、イスラエルの政策は、通常、新しい事実を積み上げていくという原則に基づいている。彼らは、新事実をつくりだす側がイニシアチブをとり続けていくと信じている。追放を「一時的なもの」といいなすことで、新しい現実、すなはち国際法や国際規範をくぐり抜ける「新解釈」を全世界に強制しようとしている。

2、追放決定が労働党の閣僚ただ一人を除いた全閣僚の承認だった。すなはち三人のマレツツの閣僚も、決定を支持した。このことは、交渉

アーヴィング米国人へのアバイ活動
(抄)

セリヅギつ。

今後のためにも、言及すべき基本点。

積み上げていくという原則に基づいている。彼らは、新事実をつくりだす側がイニシアチブをとり続けていくと信じている。追放を「一時的

なもの」といひなすことで、新しい現実、すなはち国際法や国際規範をくぐり抜ける「新解釈」を全世界に強制しようとしている。

派を落胆させた。メレツツに代表されるイスラエル「左派」は「平和陣営」の同盟者であり、社会に理解させていく架け橋であると考えられてきたのだから。

3、イスラエル側の条件下で進められていた交渉の継続に暗雲をなげかけたが、イスラエルはアラブ側の全参加国、とりわけパレスチナ・チームが交渉を続行していくことに賭けた、と私はみている。アラブ側は適当な時期がくれば交渉を開く、過去パレスチナの大義=交渉不可としてきたことを柔らげたように、トイスラエル政府は確信して決定を下したのである。

アラブ系米国人へのスペイ活動
(抄)

アラブ・ニュース紙、二月二〇日

アラブ系米国人のグループは、警察と米国ユダヤ組織との共同によるアラブ系市民へのスペイ活動の停止を要求した。彼らはまた、国務省がペレスチナ系の米国市民の警察ファイルをイスラエルに供与しているのかどうかを明確にするよう求めた。

アラブ一米研究所の会長、J・ゾグビーは昨日、米国のユダヤ組織がアラブ系社会に敵対的であることを批判し、「われわれはこの関係を覆すこと、お互いが二つのエスニック社会としての新しい関係を創ることを希望する」と語った。

抄
アラブ・ニュース紙、二月二〇日

セリヅギつ。

今後のためにも、言及すべき基本点。

積み上げていくという原則に基づいている。彼らは、新事実をつくりだす側がイニシアチブをとり続けていくと信じている。追放を「一時的

なもの」といひなすことで、新しい現実、すなはち国際法や国際規範をくぐり抜ける「新解釈」を全世界に強制しようとしている。

派を落胆させた。メレツツに代表されるイスラエル「左派」は「平和陣営」の同盟者であり、社会に理解させていく架け橋であると考えられてきたのだから。

3、イスラエル側の条件下で進められていた交渉の継続に暗雲をなげかけたが、イスラエルはアラブ側の全参加国、とりわけパレスチナ・チームが交渉を続行していくことに賭けた、と私はみている。アラブ側は適当な時期がくれば交渉を開く、過去パレスチナの大義=交渉不可としてきたことを柔らげたように、トイスラエル政府は確信して決定を下したのである。

アラブ系米国人へのスペイ活動
(抄)

アラブ・ニュース紙、二月二〇日

アラブ系米国人のグループは、警察と米国ユダヤ組織との共同によるアラブ系市民へのスペイ活動の停止を要求した。彼らはまた、国務省がペレスチナ系の米国市民の警察ファイルをイスラエルに供与しているのかどうかを明確にするよう求めた。

アラブ一米研究所の会長、J・ゾグビーは昨日、米国のユダヤ組織がアラブ系社会に敵対的であることを批判し、「われわれはこの関係を覆すこと、お互いが二つのエスニック社会としての新しい関係を創ることを希望する」と語った。

ゾグビーとアラブ系米国人全米協会の責任者たちは、警察とユダヤ組織の親密な協力関係、サンフランシスコの元警部がアラブ系米国人に関する秘密のファイルをユダヤ系の市民権、人権組織として知られている反名譽棄損連盟（ADL）に提供、という報道に関して記者会見を行った。

サンフランシスコの「アラブ系社会は、警察組織とADLにレイプされたようを感じている」とゾグビーは批判した（なお、ADLの指導者たちはそうしたことを否定している）。

サンフランシスコの元警部T・ヘラルドが管理していた一二〇〇〇以上のアラブ系などの市民に関するファイルがADLの手に渡つたと、カリフォルニアの新聞が報道した。ヘラルドは、昨年警察をやめ、フィリピンに住んでいると伝えられている。

パレスチナ系の米市民が被占領地に住む親戚を訪問したとき、米国の警察のファイルがイスラエル政府に渡されたとしか考えようがない事柄に関する厳しい尋問がなされた、とゾグビーは語った。ミシガン州立大学の学生の場合は、米国の学内での活動に関するファイルを呈示され、イスラエルでは不法と見なされているアラブ系の学生組織に属していると「自供」するよう強要された、といふ。

（以下、編注）アラブでは、このサンフランシスコの問題、イスラエルから問題にされた「ハマス・ネットワーク」、および貿易センター爆

1993年4月30日 第88号 月刊 由東レポート

テント村全体への日没後の食事を保証するため、台所用テントでは、正午過ぎから大量の料理の準備でテンテコ舞いである。

西岸のラマラの市民は、「誰も和平について語る。政治信条に関わりなく、すべてのパレスチナ人がだ」と言う。代表団の一人、G・ハイブルも、「誰もが、（和平に望みはない、イスラエルはこれを望んではいない、追放者を見れば判る）と言ふ。こんな状況で交渉には行けるわけがない」と言う。

(控) アリ・ジルバウイ（ベイルート大助教授） 「アル・コップ」紙

パレスチナ人追放史上かつてない規模の四五人に対し、イスラエル政府は追放を決定した。「左派」とよばれるこの政府は、おそらく、国際的反応にも最大の関心を払ったに違いない。イスラエルは常に自分たちの「無垢」のイメージを、特に西側において、維持することに腐心している。広報活動はイスラエルの政策の心臓部をなしている。リクード政権下のイスラエルのイメージの否定面に焦点をあてて、ラビンは昨夏の選挙に勝利したことも示される。

現政権は、アラブ側、特にパレスチナとの政治解決に向けた交渉の前進に関心を示している。労働党とメレツの選挙公約からばかりでなく、交渉がさまざまな分野でのイスラエルの目標達成に向って進んでいることを知っているのである。

それではなぜ、政府は今回のような規模と衝撃をもつた追放令を出したのか。イスラエル政府は、追放決定時、国内外の諸要素を計算にいれたうえで、国内要素に重要性を与えた。イスラエルのイメージや交渉の将来といった対外的な立場以上を考慮して、夫うつ

追放された彼らは、二月二三日から始まつたラマダンの伝統（つまり日中は食事、飲物、タバコなど）をいっさい口にしない）を、厳守していく。他方、彼らが伝統的な食事をとれるよう、「村民」の支援もいつそう強化されている。

追放問題—何か「新しい」となのが
（抄）

アリ・シルハヤ（ベイルート大蔵教授）
「アル・コッズ」紙

追放された彼らは、二月二三日から始まつたラマダンの伝統（つまり日中は食事、飲物、タバコなどをいっさい口にしない）を、厳守している。他方、彼らが伝統的な食事をとれるよう、「村民」の支援もいっそう強化されている。

テント村全体への日没後の食事を保証するため、台所用テントでは、正午過ぎから大量の料理の準備でテンテコ舞いである。

K・モハジエズは、料理の下ごしらえをしながら、「ダーラマラの市民は、誰も和平についての宣伝用のビデオやカセットにも、リーフレットやビラにも、用いられている。

西岸のラマラの市民は、「誰も和平については語らないが、誰もが追放者について語る。政治信条に関わりなく、すべてのパレスチナ人がだ」と言う。代表団の一人、G・ヘティブも、

ルダン側の対応などのニユースが、「村民」の援助や家族から届けられるメッセージとともに、彼らの日々の生活=闘いの糧となっている。

う
だが、クリストファーが安保理決議四二五に触れようとしなかったのは、個別の解決到達する前に、中東全般での広範な解決が必要と米政府が考えているからである。また、イスラエルはアラブの土地からの撤退の条件として「全面的な平和条約の締結」を主張しており、それは外交関係の樹立、国境の開放が完全になされることが第一条件で、イスラエル軍の撤退はその後という、国連決議の解消を狙つたものだとする見方が強く存在している。

（その一）
イスラム・センターを破壊（抄）
ロイター、二月一八日

新しい病院の建物が屋根なしのまま放置されている。イスラエルのイスラム組織への弾圧による犠牲の一つである。

先月、六階建てのトルカラム医療センターの屋根の工事が、着工されんとしていたその時、イスラエルの軍事当局から即刻の停止指令がきた。この地域にはオスマン・トルコの統治時代に建てられた六〇ベッドの政府病院しかなく、そこはいつも満員である。

被占領地の実情

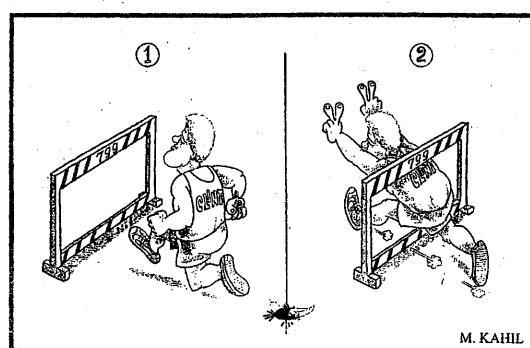
イスラム・センターを破壊（抄）

破壞抄

彼はこの医療センターの基金のために、被占領下のパレスチナ人や、湾岸地区の実業家や救援組織から義援金を、数年がかりで集めた。

先月、六階建てのトルカラム医療センターの屋根の工事が、着工されんとしていたその時、イスラエルの軍事当局から即刻の停止指令がきた。この地域にはオスマン・トルコの統治時代に建てられた六〇ベッドの政府病院しかなく、そこはいつも満員である。

占領軍の暴虐は、あちこちの町や村でも行われてゐる。兵たちは、最近、やはりザカハ委員会が運営している西岸サバステイヤ村の診療所に乱入し、その勤労者すべてに抵抗組織との関係を尋問していくつた。近くのブルカ村では、モスクが捜索され、無期限の閉鎖を命じられた。



八九

口イタ一、二月二八日
新しい病院の建物が屋根なしのまま放置されている。イスラエルのイスラム組織への弾圧で

対して大がかりな手入れを行つた。同大学は、一二月の追放・大量逮捕で数名の教授を含む打撃を受けたのだが、軍は鍵のかかった部屋を蹴

う
必要なら、その時それは討議されることになる

三五〇万ドルの建設費をかけたこの医療センターは、被占領下の西岸、ガザにあるいくつかのイスラム救済機関と関連した数十の施設の一つであり、イスラエル当局にイスラム抵抗運動の下部構造と見なされ、破壊の危機に瀕しているものの一つである。

連日のように、イスラエル軍と秘密警察はモスク、診療所、クラブなどに乱入している。地方のザカハ委員会の責任者M・ヤシンは、「彼らは、われわれの救済委員会が抵抗組織と関係があるかどうかの調査がすむまで建設を停止するよう言つてきた」と語る。兵たちは、基金提供者の名前が入っているファイルと援助を受けている約四〇〇〇家族のデータや他の重要書類を持ち去り、一週間ほどして返された、と彼は言う。

1993年4月30日 第88号 月刊 中東レポート

弾という最近の三つの事件と国際的報道機関などのあり方に疑問の声が上がっている。いくつか挙げておこう。

A D Lと米＝イスラエル広報委員会（A I P A C）はアラブ系米人の活動に関するファイルを蓄積し、大学、報道機関、政界などにその「ブラック・リスト」を配布している。

一月末にイスラエルで逮捕された「ハマス活動家」の一人の名前が、サンフランシスコで押収されたA D Lのファイルに載っていた。

現サンフランシスコ市長は、かつて同市警の長官を務めていた際に、A D Lと深い関係があり、A D Lの斡旋で八六年にイスラエルを訪問し、イスラエルのパレスチナ・テロ対策を学習したと得意氣に語った。

湾岸戦争時にF B Iは多くのアラブ系市民を尋問したが、そのF B I捜査の多くは、A D LとA I P A Cからの資料に基づいてなされたとした。

ADLの元責任者パルムッターは、「中東における和平の大枠はイスラエルを死滅させるワナ」と発言し、右派ユダヤ組織は、アラブとモスレムの危険性を喚起し、米国の中東政策を和平から遠ざけようと策動している。

貿易センター爆弾で「犯人」として捕まつているパレスチナ系市民は、レンタカー会社に連絡先としてユダヤ女性の電話を登録したが、この件はまったくカットされ、エジプトのモスレム指導者に焦点が絞られている。

アンナ・ハール紙、三月三日および四日
案を拒否（抄）

イスラエルは、再び国境問題を取り扱う共同軍事委員会の設置を持ち出してくるだろう。外交筋によれば、イスラエルはレバノンとの「関係の正常化」を狙っている。それは、多分に、全体的な中東和平の枠組みとは別個の解決策としてあり、それをもつて包括的な方向への道を切り開く（本当は、逆だ！）というのがイスラエル側の論理だという。

レバノン側は、イスラエル軍の撤退へと導かれるものなら、共同軍事委員会や他の方法に反対はしないという対応をしている。だが、そのためにはいくつかの点が明確にされねばならない。すなわち、安保理決議四二五に沿って、被占領下の南部からイスラエル軍がどのように撤退するのか、撤退の時期、同時に潜在的な国境越えの攻撃への対処など安全保障に関するメッセージなどでの基本合意が必要である。

もし、そうなつたなら、イスラエル側が「脅威」と見なしているハズバラーナなどのレジスタンスに対して効果的な制限策をレバノン政府は採ることになろう、レバノン軍は、レジスタンス諸組織の武装を解除し、国境越えの攻撃を防止する能力を有している、と外交筋は語る。そういうことになれば、シリアは、諸組織への圧

シリア軍の撤退にもつながる、とも彼らは言う。しかししながら、彼らは、中東地域のすべての関係諸国が全面的な解決へと至らない限り、そうしたことは起こらないと見ていているし、イスラエルがそうした調停に合意するとは考へてもいない。決議四二五は、イスラエルの即時、無条件の撤退を呼びかけている。が、イスラエルは前提としてレバノンとの全面的な和平合意を求めている。

多分、米国は、問題の解決に向けて介入し、イスラエル側に、レバノンに関してはなんらの領土的な野心のないことを証明するためにも、時期を設定することなく、国際的に承認された国境線まで撤退するという原則に合意するよう提案するであろう、と外交筋は見ている。そして、そうした対応はレバノン側をそうした委員会の設置へと動かすことになろう、と。

他方、クリストファーはレバノンがいつイスラエルとの和平条約にサインすることになると考えているかという問い合わせて、それはシリアア、ヨルダン、パレスチナがそうした後だろう、あるいはシリアがサインした直後かも知れない」と最近語った、とレバノン政府筋はいう。

他方、レバノンの国防相M・ダルールは、クリストファーが、イスラエルとの国境問題を解決するために、共同軍事委員会の設置を提案してきたが、レバノン側はこれを却下したと語った。「われわれは彼にこの問題は決議四二五の適用に觸れる問題である、と云えた」。(なぜな

・ラモン、再び、ガザからの撤退を呼びかけ。

イスラエルの報道界でも論議。

・南部、レジスタンスの作戦 ゲリラ側二人死

亡。

三月四日

・エルサレム、ユダヤ人へのナイフ攻撃。

・シャラー、イスラエルは占領と国連決議の無

視の結果、ジレンマに陥っている。その人種

主義的な体制、占領と抑圧を続けることがで

きなくなっている。

・米大使、米はイスラエル援助を減らすだろう

(本文参照)。

三月六日

・PLO執行委員会、和平過程の再開はラン

ド・フォー・ピーの原則ならびにパレスチナ人民への権利の保証の如何による。

・イスラエル、アイネヘルワのキャンプを空爆。

三月七日

・ランティスイ、ヨルダンの立場を肯定的で榮

誉のあるものと評価。他方、もし、アラファトが追放問題を脇に置くなら、彼はパレスチナ人民の意志を脇に置くことになる、と警告。

三月八日

・ガザ、パレスチナ人が入植者を殴り殺す。人

民の鬭い、一人死亡、一人負傷。他方、入植者がパレスチナ人に乱射、一人死亡、多数負傷。

・ファタハとハマスの会議(アンマンで)。

三月九日 インティファーダ六カ月目

・被占領地、ゼネスト、人民の鬭い、一〇人負傷。シリア、レバノンなどのキャンプでもゼ

・ネスト。

・英パレスチナ討議再開、ホッグがPLO代

表やF・Fセイニと会談。

・カドウミ・シャラー会談。

・ハズバラ、政府要人による自制を求める發

言はレジスタンスの選択肢をなくそうという

目的のものと非難。

三月一〇日

・エルサレム地区、一人射殺される。追放後、

死者五五人、インティファーダでは一〇二

七人、イスラエル側は一一七人死亡。

・米ロ、四月二〇日からのワシントンでの和平

交渉の招待状を配布。しかし、パレスチナ側

は受け取り拒否(本文参照)。

・ホッグ、イスラエル政府が追放政策を将来行

わないことを明確にすべき、これは基本的な

ことだと考える。

●編集後記

カイロのカフェでの爆弾でも、インドのボン

ベイでの多発爆弾でも、ニューヨークの貿易セ

ンター爆弾と同様、必死になつてイランと結び

付けようという意図が露骨に出されています。

が、これまで貿易センター爆弾と同様、そ

した画策のことごとくが失敗という状況。

もし、言われるよう、原理主義者の仕業と

仮定しても、イランとは結ばないようです。

サダト暗殺事件などを手がけ、自らも暗殺さ

れそうになつた経験のある、エジプトの元内相

が、(エジプトの)原理主義者の指導者の何人

かは、アフガニスタン(ペキスタン)国境に拠点を構えていて、そこから指令を出していくとか。では「侵略、空爆、虐殺、などなどありとあらゆる犯罪行為を展開しているイスラエルに對しては?」。いろんなニュースが流れる度に、「イスラエルに對しては?」「パレスチナには(支援はないの)?」とパレスチナの人々は、西側のあります。そして、それが彼らの方を皮肉っています。そこで、それが彼らの批判する目を鍛え、闘う力になつてあります。

